

## 「教育」について考えるきっかけ

### 1. 教育を考える一言

『芸術教育』の最大の問題の一つは、美術で美術を教え、音楽で音楽を教え、演劇で演劇を教  
えてきたことにあり、美術でアートを教え、音楽でアートを教え、演劇でアートを教えることを  
怠ってきたことにある。」  
一佐藤学

### 2. 背景

学部生の時、ふらっと立ち寄った大学の図書館で私はこの本に出会いました。この本を手にと  
った理由は特になく、当時東京大学で教鞭を取られていた先生、「佐藤学」という名前と、題名の  
「アート」という文字が目に入ったからでした。上記の一言は、佐藤学・今井康雄編集の『子ども  
たちの想像力を育む アート教育の思想と実践』の「はじめに」で佐藤学が述べている言葉で  
す。ここでいう「アート」という言葉は、「芸術」という言葉よりも広義に定義づけられており、  
ただ絵を描いたり、何かをつくったりする行為だけではなく、「もう一つの現実」「もう一つの世  
界」「もう一人の他人」「もう一人の自己」などとの出会い、対話する創造的行為の技法、人間が  
生きるために必要な技法として捉えられています。

### 3. 考察

日本の造形教育は、図画工作科、美術科の授業で扱われています。自分自身もそのような教育  
を受けてきたので、美術の時間で美術を教え、音楽の時間で音楽を教えるのは当たり前のことで、  
そこに疑問を持つ余地はありませんでした。しかしこの本を読んでみて、今まで自分が受けてき  
た「教育」が正解、教育の「全て」ではなく、今の教育の問題点や課題をしっかりと見つめ直し、  
これから先どのような教育が必要なのかを俯瞰的、客観的に考えていかなければならないと実感  
することができました。つまり、この一言は私にとって、今まで自分が受けてきた当たり前の「教  
育」を疑い、新たな視点から今後の「教育」について考えさせるきっかけになりました。

現在の日本の造形教育は授業時間数が削減され、カリキュラムの周辺に追いやられ、いわゆる  
副教科という扱いになっています。けれども造形教育は、ただ道具や機械の使い方を学んだり、  
何かを描いたりつくったりするためのものではありません。むしろ、そのような造形的な活動を通  
して、こういう風につくりたい、つくりかえたいという人間の意志や、豊かな感情や情操を育  
てたり、作品を通して自己や身の回りの生活や社会などと向き合って対話をしたりする、アート  
であるべきではないでしょうか。

私は、卒業論文に引き続き、修士論文でもドイツの自由ヴァルドルフ学校を研究対象にしてい  
ます。この学校は、調和的な人間を育成するという大きな目標を持ち、学校教育全体に造形的な  
活動を取り入れた教育を行っていることで知られています。日本の教育に、自由ヴァルドルフ学  
校の教育実践をそのまま持ち込むことは難しいですが、それをもとに新たな視点を持って、日本  
の今後の教育のあり方について考えるという点では、有益であると考えられます。この一言を大  
切にし、普段当たり前だと思っていることを疑って見直したり、見方や視点をかえたりする、ア  
ートの視点を持って、教育に対する考えをより一層深めていきたいです。

#### 引用参考文献

佐藤学・今井康雄編『子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践』東京大学出版会、2003  
年